密室ミステリガイド

飯城勇三

有栖川有栖

ミステリファン必携。
類書のない好著。
密室トリックに詳しくなれるだけではなく、ミステリの味わい方を教えてくれる1冊。

W推薦！

北山猛邦

僕たちは182年前から、開かない密室を探し続けている。

海外20作＋国内30作の密室ミステリを図版付きで解説！
本格ミステリの〈密室〉の歴史を辿る傑作ガイド！

密室ミステリガイド

飯城勇三

星海社

263

SEIKAISHA SHINSHO

はじめに

本書のテーマ

本格ミステリにおいて、密室ものは常に主流を占(し)めてきました。「本格に石を投げると密室に当たる」から「密室にあらざれば本格にあらず」まで、いろいろ言われてきました。——というのは大げさですが、密室ものが本格ミステリを象徴(しょうちょう)するジャンルであることは確かです。本格ミステリの〈推理〉を象徴する言葉が「読者への挑戦」だとすると、〈トリック〉を象徴する言葉は「密室」だと言えます。

本格ミステリでは、「先人たちの積み重ね」が重要ですが、中でも、密室ものはその重要さが突出しています。ある作家がある密室トリックを考える。後続の作家はそれとは異なる密室トリックを考える。あるいはその密室トリックのバリエーションを考

える。あるいは他の密室トリックとの組み合わせを考える。あるいは同じ密室トリックでも舞台設定や時代設定や状況設定やプロットや叙述を変える。――こういった後続の人たちの創意工夫によって、密室ミステリの流れは途切れることはありませんでした。その結果、密室ものは、本格ミステリを象徴するジャンルになったのです。

本書は、こういった密室ミステリにおける「先を行く者の独創性」と、「後に続く者の創意工夫」を基準として、優れた50作を紹介するガイドブックです。

本書の狙い

密室ミステリのガイドブックとしては、有栖川有栖による二冊のすばらしい本――『有栖川有栖の密室大図鑑』（一九九九年）と『図説 密室ミステリの迷宮』（二〇一〇年／二〇一四年に『完全版 密室ミステリの迷宮』と改題され増補版が刊行）――があります。それなのに、あえて今、同じテーマで本を出したのは、みなさんにこの二冊とは異なる楽しみを提示できると考えたからです。それは――密室トリックを明かしてのガイド。本書の第一部は通常のガイドですが、第二部では、トリックを明かした上でのガイド（考察と言った方が良いかもしれません）を行っています。

あなたは、すばらしいトリックを読んだとき、誰かと話したくなりませんか？　あなたは、他のミステリ・ファンと、双方が読んでいる本についてネタバラシありの話をするのが楽しくないですか？　本書の狙いは、読者にその楽しみを与えることなのです。

加えて、トリックを明かすことによって、これまでにない評価軸を提示するというのも、本書の狙いです。例えば、J・D・カーの密室もののベストは『三つの棺（ひつぎ）』と言われていますが、本書で選んだのは『緑のカプセルの謎』。ですが、本書の第二部を読んだ人には、この選択の理由がわかってもらえると思っています。

また、通常の密室トリックは犯人が実行したものなので、作中探偵が説明できます。しかし、叙述の仕掛けなどの一部の密室トリックは、作中探偵には説明できません。本書では、こういった「作中で説明されていない趣向」も取り上げています。これもまた、トリックに対する新たな評価軸の提示になるでしょう。

そしてまた、密室ミステリの評価軸はトリックだけではありません。例えば、トリックは既存のバリエーションでも、それをあばく推理が優れている作品は評価すべきでしょう。本書では、トリックを明かすことにより、推理に対する考察も可能にして

いるわけです。同じように、「密室作成の動機」や「密室を利用した犯人隠し」や「密室とプロットの連携」なども、本書では考察しています。

ではここで、『有栖川有栖の密室大図鑑』と本書を比べてみましょう。この二冊では、作家の重複が十八作家なのに対して、作品の重複は三作しかありません。これは、私が意図的に重ならないようにしたのではなく、トリックを明かして考察するという前提で作品を選んだためです。その証拠に、重複した三作（『帽子から飛び出した死』『本陣殺人事件』『すべてがFになる』）に対する有栖川のガイドを読むと、トリックに踏み込んだ言及が多いのに気づくと思います。その一つ、『帽子から飛び出した死』のガイド文で、有栖川は「隔靴掻痒になる」と書いていますが、本書は、この靴を脱いでかゆいところに手が届くようにしたわけです。本書と『有栖川有栖の密室大図鑑』を併せて読むと、多様な評価軸による密室ミステリの魅力を味わうことができるに違いありません。

本書の読者へ

ただし、こういった狙いは私の立場からのものなので、選ばれた作品の作者にとっ

ては、不満しかないでしょう。自分が苦労して考えたトリックが、他人の本でばらされてしまっているわけですから。

そこで、本書の読者にお願いがあります。第一部のガイドを読み、未読の作品に興味を持ったら、その作品を読んだ〝後〟に、第二部に進んでください。選ばれた50作の中に、入手困難な本はありません。新刊書店になくても、ネットなどを利用すれば容易に手に入ります。私自身、改稿や改訳をチェックするために二十冊以上をあらたに購入しましたが、入手困難な本はありませんでした。ひょっとしたら、本書のせいで品切れ本の古書値が上がったり――はしないか。

さらに、第一部のガイド文や見取り図には、ネタバラシにならないように、嘘を書いている場合があることもつけ加えておきます。例えば、時間差トリックを用いている作品では、被害者が実は発見時に生きていても「死体」と書く、などです。従って、本書を読むだけでは、対象作品の本当の面白さはわかりません。第一部→対象作品→第二部の順に読むのが、一番楽しめるわけです。

本書が、「トリックを明かすことによって密室ミステリに新たな楽しみ方を加える本」になるのか、あるいは、「コスパ&タイパ最高！　四分で読める密室ミステリ名作

50！」になるのかは、みなさん次第です。どうか、よろしくお願いします。

もしも、先に第二部を読んでしまった場合でも、あらためて対象作品を読んでほしいと思います。第二部の内容を頭に入れて読むと、多くの発見があるに違いありません。

本書の成り立ち

私は大学時代、老舗（しにせ）ミステリ・ファンクラブ〈ＳＲの会〉の会誌《ＳＲマンスリー》の編集長を務めていました。その一九七九年十一月号で組んだ特集のテーマが、「密室ミステリ」。会員二十名参加の密室ミステリのベスト10選出などを行い、私自身は上位作品に短評を添えたり、クレイトン・ロースンの密室ものの考察を書いたりしました（興味のある人は、http://sealedroom.blog.jp/へ）。実は、この「はじめに」の冒頭の「本格ミステリにおいて〜」から「〜いろいろ言われてきました」までの文は、その特集の冒頭から再録したものなのです。私が立合いでハッタリをかますのは、昔からだったわけですね。

私はまた、この会誌の一九七九年三月号と七月号に、ジム・ハットン主演のＴＶ版

エラリー・クイーンに関する記事を書いています。このＴＶドラマは、手がかりと推理がすばらしいので、何とかこれを会員に紹介したいと思い、頭を絞りました。そこで考え出したのが、二号に分けて紹介するという方法。前編はネタバラシなしの紹介文、後編はネタバラシありの考察にしたわけです。

もうわかってもらえたでしょう。本書は、この二つの企画のアイデアが基になっているのです。四十年以上昔のアイデアを発展させた本書は、私にとって、とても楽しい本になりました。みなさんにとっても楽しい本になっていることを望みます。

目次

はじめに 3

第一部
密室ミステリ・ベスト50 問題篇 15

海外篇ベスト20 17

1 エドガー・アラン・ポー ―― 「モルグ街の殺人」18
2 モーリス・ルブラン ―― 『奇岩城』20
3 カミ ―― 「黒い天井」22
4 エラリー・クイーン ―― 『ニッポン樫鳥の謎』24
5 クレイトン・ロースン ―― 『帽子から飛び出した死』26
6 アガサ・クリスティ ―― 『ポアロのクリスマス』28
7 ジョン・ディクスン・カー ―― 『緑のカプセルの謎』30
8 ピエール・ボアロー ―― 『殺人者なき六つの殺人』32
9 アントニイ・バウチャー ―― 『密室の魔術師』34
10 ジェイムズ・ヤッフェ ―― 「皇帝のキノコの秘密」36
11 マージェリー・アリンガム ―― 「見えないドア」38

国内篇ベスト30 59

1 横溝正史 ―― 『本陣殺人事件』60
2 高木彬光 ―― 『能面殺人事件』62
3 天城一 ―― 「明日のための犯罪」64
4 鮎川哲也 ―― 「白い密室」66
5 中井英夫 ―― 『虚無への供物』68
6 都筑道夫 ―― 『蜃気楼博士』70
7 辻真先 ―― 『仮題・中学殺人事件』72
8 笠井潔 ―― 『サマー・アポカリプス』74
9 中町信 ―― 『追憶（recollection）』76
10 法月綸太郎 ―― 『雪密室』78
11 麻耶雄嵩 ―― 『翼ある闇』80

12 フレドリック・ブラウン――「姿なき殺人者」40
13 クリスチアナ・ブランド――『ジェゼベルの死』42
14 アラン・グリーン――『くたばれ健康法！』44
15 W・ハイデンフェルト――〈引立て役倶楽部〉の不快な事件」46
16 エドワード・D・ホック――「長い墜落」48
17 ランドル・ギャレット――『魔術師が多すぎる』50
18 ジョン・スラデック――「密室 もうひとつのフェントン・ワース・ミステリー」52
19 スタンリイ・エリン――『鏡よ、鏡』54
20 ポール・アルテ――『赤い霧』56

コラム1 HOW 密室はどう作られる？――密室トリックの分類 122
コラム2 WHY 密室はなぜ作られる？――密室作成動機の分類 140
コラム3 WHAT 密室ミステリ・NEXT50――次点50作 150

おわりに 157

12 有栖川有栖――『46番目の密室』82
13 綾辻行人――『黒猫館の殺人』84
14 泡坂妻夫――「凶漢消失」86
15 京極夏彦――『姑獲鳥の夏』88
16 小森健太朗――『ネヌウェンラーの密室（セルダブ）』90
17 森博嗣――『すべてがFになる』92
18 古泉迦十――『火蛾』94
19 舞城王太郎――『世界は密室でできている。』96
20 貴志祐介――『硝子のハンマー』98
21 柄刀一――『密室キングダム』100
22 大山誠一郎――「少年と少女の密室」102
23 芦辺拓――『スチームオペラ』104
24 青崎有吾――『体育館の殺人』106
25 井上真偽――『聖女の毒杯』108
26 二階堂黎人――『巨大幽霊マンモス事件』110
27 相沢沙呼――『マツリカ・マトリョシカ』112
28 今村昌弘――『屍人荘の殺人』114
29 米澤穂信――『黒牢城』116
30 北山猛邦――『月灯館殺人事件』118

注意！　第二部ではベスト50作品の真相を明かしています。

第二部

密室ミステリ・ベスト50 解決篇

159

海外篇ベスト20

161

1 エドガー・アラン・ポー――「モルグ街の殺人」162
2 モーリス・ルブラン――『奇岩城』164
3 カミ――「黒い天井」166
4 エラリー・クイーン――『ニッポン樫鳥の謎』168
5 クレイトン・ローソン――『帽子から飛び出した死』170
6 アガサ・クリスティ――『ポアロのクリスマス』172
7 ジョン・ディクスン・カー――『緑のカプセルの謎』174
8 ピエール・ボアロー――『殺人者なき六つの殺人』176
9 アントニイ・バウチャー――『密室の魔術師』178
10 ジェイムズ・ヤッフェ――「皇帝のキノコの秘密」180
11 マージェリー・アリンガム――「見えないドア」182

国内篇ベスト30

203

1 横溝正史――『本陣殺人事件』204
2 高木彬光――『能面殺人事件』206
3 天城一――「明日のための犯罪」208
4 鮎川哲也――「白い密室」210
5 中井英夫――『虚無への供物』212
6 都筑道夫――『蜃気楼博士』214
7 辻真先――『仮題・中学殺人事件』216
8 笠井潔――『サマー・アポカリプス』218
9 中町信――『追憶（recollection）』220
10 法月綸太郎――『雪密室』222
11 麻耶雄嵩――『翼ある闇』224

12 フレドリック・ブラウン――「姿なき殺人者」184
13 クリスチアナ・ブランド――『ジェゼベルの死』186
14 アラン・グリーン――『くたばれ健康法！』188
15 W・ハイデンフェルト――「〈引立て役倶楽部〉の不快な事件」190
16 エドワード・D・ホック――「長い墜落」192
17 ランドル・ギャレット――『魔術師が多すぎる』194
18 ジョン・スラデック――「密室 もうひとつのフェントン・ワース・ミステリー」196
19 スタンリイ・エリン――『鏡よ、鏡』198
20 ポール・アルテ――『赤い霧』200

12 有栖川有栖――『46番目の密室』226
13 綾辻行人――『黒猫館の殺人』228
14 泡坂妻夫――「凶漢消失」230
15 京極夏彦――『姑獲鳥の夏』232
16 小森健太朗――『ネヌウェンラーの密室（セルダブ）』234
17 森博嗣――『すべてがFになる』236
18 古泉迦十――『火蛾』238
19 舞城王太郎――『世界は密室でできている。』240
20 貴志祐介――『硝子のハンマー』242
21 柄刀一――『密室キングダム』244
22 大山誠一郎――「少年と少女の密室」246
23 芦辺拓――『スチームオペラ』248
24 青崎有吾――『体育館の殺人』250
25 井上真偽――『聖女の毒杯』252
26 二階堂黎人――『巨大幽霊マンモス事件』254
27 相沢沙呼――『マツリカ・マトリョシカ』256
28 今村昌弘――『屍人荘の殺人』258
29 米澤穂信――『黒牢城』260
30 北山猛邦――『月灯館殺人事件』262

第一部　密室ミステリ・ベスト50

問題篇

- 海外20作、国内30作の密室ミステリを紹介しています。
- 該当書籍や収録書籍は、２０２３年3月末時点で刊行時期や値段を考慮して選びました。
- 図版は、作品の描写から推測し作図したものです。作中に図版がある場合も、あらためて作図しました。
- 紹介文にネタバラシはありませんが、真相のヒントめいた記述はあります。予備知識なしで作品を読まれたい方は、未読作は避けてお読みください。
- 紹介文や図版では、ネタバラシを避けるため、作中のミスリードに則った嘘を記述している場合があります。

海外篇ベスト20

モルグ街の殺人

エドガー・アラン・ポー

発表＝一八四一年／邦訳＝『ポオ小説全集Ⅲ』（創元推理文庫）他所収

Story

私の友人デュパンは特異な分析力の持ち主だった。その彼がパリのモルグ街で起きたレスパネー母娘殺人事件に興味を抱く。四階建ての館に二人きりで住んでいる母娘の殺人――娘は絞殺され煙突に押し込められ、母親は剃刀で首を切られて全身打撲で裏庭に倒れていた。

不思議なことに、母娘の悲鳴を聞きつけた近所の人たちが四階に上がる際に、どこの国の言葉ともわからない声が聞こえていたにもかかわらず、四階の部屋に突入すると、犯人は忽然と姿を消していたのだ――完全な密室の中から。

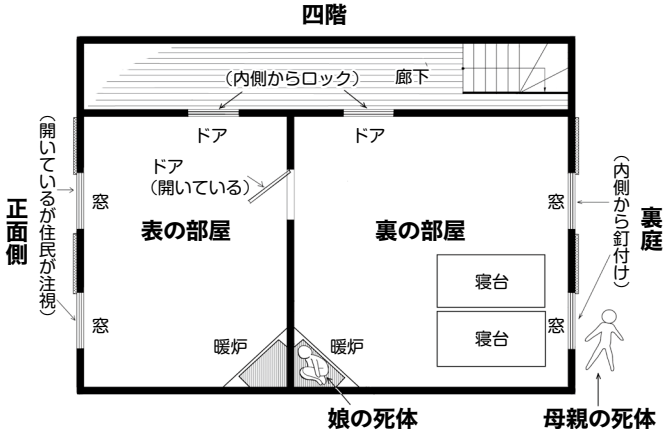
Situation

四階は二部屋で、部屋と部屋をつなぐドアは施錠されてはいない。表の部屋の二つの窓は正面玄関側にあり、住民たちが見ていたが、誰も出ていない。裏の部屋の二つの窓は裏庭に面していて、見られてはいないが、内側から釘付けされていた。廊下に出るドアは、どちらの部屋も内側から施錠。暖炉（原文は複数形）から続く煙突は途中から細くなっていて、大きな猫でも通ることはできない。しかも、住民がドアをこじ開ける直前まで、部屋から犯人らしき男の声と物音が聞こえていたのだ！

Standard-Guide

本作は現代ミステリの第一号なので、当然、密室ミステリの第一号になる。だが、トリックの評価は高くない。密室もののベスト選出でも、「トリックは大したことはないが歴史的価値で」といった感じのコメントが並び、「重要なデータが読者に提示されていない」という批判もある。さらに、密室ミステリ研究家のロバート・エイディによって、〝密室ミステリ第一号〟の栄誉も、シェリダン・レ・ファニュの短篇「アイルランドのある伯爵（はくしゃく）夫人の秘めたる体験」に奪われてしまった。

しかし、これらはすべて、的外れな意見と言える。本作のトリックは現在でも通用する優れたものであり、アンフェアと批判するのは間違いであり、第一号なのだ。



奇岩城

モーリス・ルブラン

発刊＝一九〇九年／邦訳＝ハヤカワ・ミステリ文庫 他

Story

ジェーヴル伯爵邸に泥棒が入り、伯爵は気絶させられ、秘書のダヴァルは殺される。しかも、銃で撃たれて重傷を負った盗賊は、密室とも言うべき伯爵の敷地内から忽然と消えてしまうのだった。

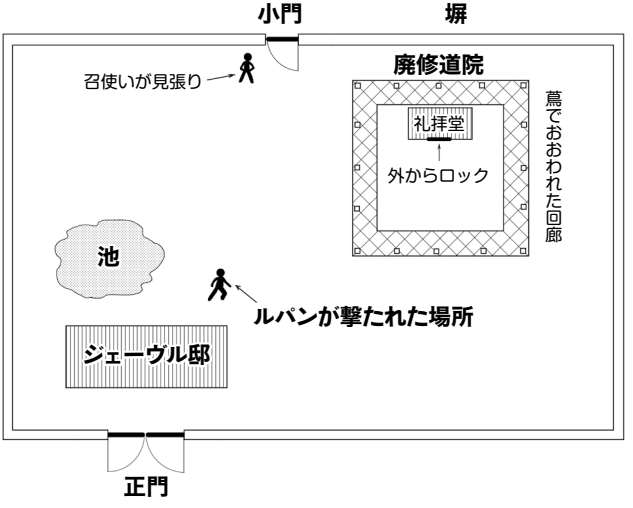
捜査に乗り出した高校生のイジドールは、事件の真相をあばき、盗賊がアルセーヌ・ルパンであることを突きとめる。かくして幕を開けた怪盗と少年探偵の対決は、舞台を《針の城》に、そして、《奇岩城》に移し、ついにシャーロック・ホームズまで参戦するのだった。

Situation

〔伯爵邸での人間消失〕伯爵の姪レイモンドに撃たれて重傷を負ったルパンは、廃修道院に向かい、木蔦で覆われた回廊の奥に姿を消す。そこに残っている建物は礼拝堂だけだが、扉には外から鍵がかかっていた。仮に、ルパンがここに逃げ込むことができたとしても、外からしか鍵はかけられない。その奥の塀についた小門は召使いが見張っていたが、誰も出ていないと証言。他の使用人たちもそれを裏づける。ならばルパンは、どこに姿を消したのだろうか？　しかも、重傷を負った身で。

Standard-Guide

ルパン・シリーズの密室ものでは、汎用性のある優れた原理を編み出した「テレーズとジェルメーヌ」（『八点鐘』）か、島田荘司流の奇想を先取りした『二つの微笑を持つ女』あたりを選ぶべきかもしれない。しかし、トリックを明かして紹介するという本書のコンセプトでは、『奇岩城』が上にくる。なぜかというと、この作品のトリックは、反則すれすれの境界線上にあり、読者がなかなか思いつきにくいものなのだ。あるいは、「勘では当たるが、論理的に推理しようとすると外れるトリック」だと言っても良いかもしれない。そして、外した読者は、こう言うだろう――「このトリックは実現性はあるかもしれないが、これを認めたら密室ミステリは成り立たなくなってしまう」と。



黒い天井

カミ

発表＝一九二六年／邦訳＝『笑いの錬金術』（白水社）他所収

Story&Situation

カフェの広間でカードゲーム中の公証人が突然宙に浮かび、そのまま絞め殺される。しかも、殺人の直前には、「手の無い腕を下ろせ」という声と咆吼が聞こえてきた。

捜査に乗り出した名探偵ルーフォック・オルメスが天井を調べると、大皿ほどの大きさの丸い跡がいくつも残されていた。その跡は外まで続き、村はずれの《死の穴》と呼ばれる深い穴に消えていた。そして、あらわれた公証人の友人が、「ピーナッツ売りのシャム人が怪しい」と告発する。だが、殺人が起こった時、そのシャム人はカフェでピーナッツを売っていたのだった……。

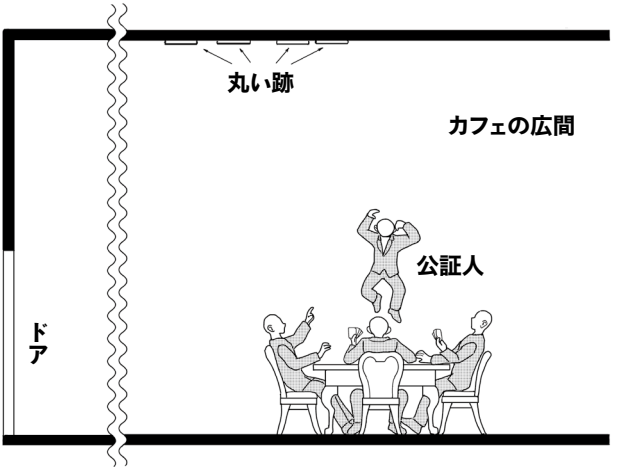
夜になると、今度はその友人が広間で宙に浮かんで絞殺されてしまう。しかも、謎の声と咆吼に加え、今回は天井から水が雨のように降って来たのだ。さらに、オルメスが《死の穴》に向かうと、そこではシャム人が見えないものに何かを与えている姿が見えた。

翌日、真相を見抜いたと語るオルメスは、シャム人を侮辱してからカフェに戻る。そして、広間の白い天井を煤で黒くして、何かを待ち構えるのだった。

Standard-Guide

密室ミステリには、意図的に〝実現不可能なトリック〟を――ダミーの解決ではなく――真の解決にしたナンセンスな作風のものがある。私の個人的な話で申しわけないが、このタイプに関しては、少年時代に愛読した忍者漫画の忍法の解説や、野球漫画の魔球の解説を思い出して、妙に懐かしい気分になってしまう。

そこで、「実現不可能な密室トリックを実現させた作品」を何作かリストアップしたが（横田順彌の〈金大事包助シリーズ〉「Yの悲劇」とか）、結局、カミのこの作品だけに留めた。というのも、「カミを入れておけば、他の作家はいらないじゃん」という気分になってしまったからだ。おそらくみなさんも本作を読めば、私に同意してくれると思う。



ニッポン樫鳥の謎

エラリー・クイーン

発刊＝一九三七年／邦訳＝創元推理文庫、別訳『日本庭園の秘密』（ハヤカワ・ミステリ文庫）他

Story

日本育ちの女流作家カーレン・リースが、密室状況で殺される。現場に凶器が残されていない以上、自殺ということはあり得ない。だが、他殺の場合、隣の居間にいたエヴァしか現場に出入りできない。つまり、彼女が無実だとしたら、現場は完全な密室になってしまう。

私立探偵テリーとエラリーはエヴァを信じ、密室の謎に挑む。密室内に残された空の鳥籠が意味するものは？　屋根裏部屋に潜んでいた人物の正体は？　そして、外から窓を通して石が投げ込まれた理由は？

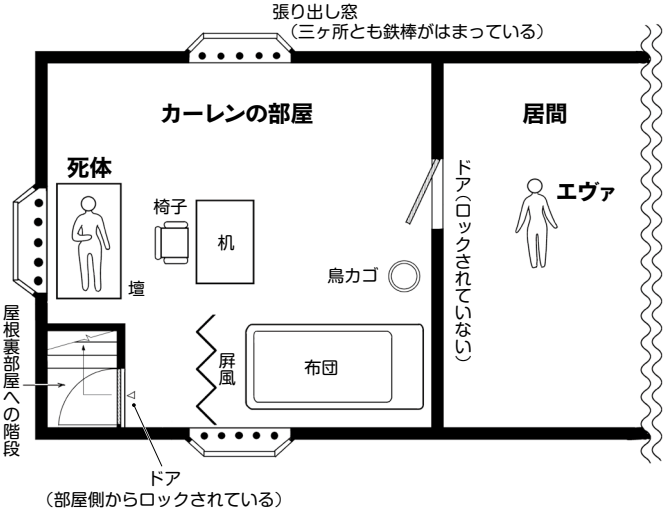
Situation

犯行現場はカーレンの部屋（寝室）。居間とのドアは施錠されていないが、エヴァに気づかれずに出入りすることはできない。三つの窓はすべて十五センチ間隔で鉄棒がはまっている。屋根裏部屋に上る階段があるが、ドアは寝室側から施錠してあった。現場に凶器（ハサミの片割れ）が残されていないので、自殺の可能性はない。従って、殺人の前後にずっと居間にいたエヴァが犯人という結論になる――が、エヴァは自分だけが犯行が可能な状況で殺人を犯すほど愚かではないのだ。

Standard-Guide

「密室トリックを解明する推理」を描こうとする場合、相性の良いトリックと悪いトリックがある。例えば、〈紐で施錠するトリック〉は、紐の使い方を消去法で絞り込めないため、相性が悪い。クイーンさえも、このタイプの密室は成功したとは言い難い。逆に、〈時間差トリック〉などは、推理で「出入りできるのはこの時間帯のみ」、といった消去法が可能になるので相性は良い。そして、本作の密室のタイプはこちらになり、成功を収めている。

ただし本作では、トリックよりも、その使い方を高く評価したい。本作では、密室を利用した見事な推理を披露するだけではなく、〈物理的にも心理的にも犯人とは思えない犯人〉を作り出すことにも成功しているのだ。



帽子から飛び出した死

クレイトン・ローソン

発刊＝一九三八年／邦訳＝ハヤカワ・ミステリ文庫 他

Story

アパートの一室で神秘哲学者サバットが殺される。発見者は心霊学者ワトラス、手品師タロット、霊媒ラプール、そして語り手の広告マンであるハート。現場は完全な密室で、オカルト的な装飾がなされていた。続いて、警察が監視する中、タロットがタクシーから消失。その後、自宅で死体となって見つかる。しかも、周囲に降り積もった雪には足跡がなかった。

この密室に対して、二人の奇術師デュヴァロとマーリニは、それぞれ異なる推理を披露するのだが……。

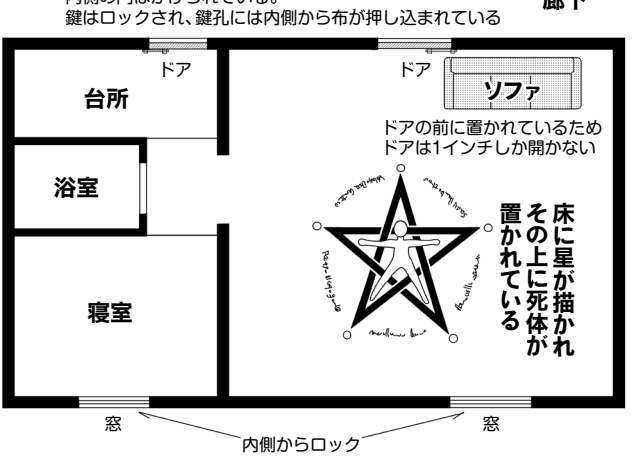
Situation

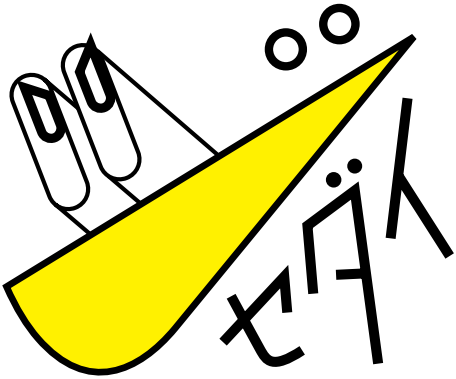
〔第一の殺人〕被害者の部屋に出入りするドアは、居間と台所に一ヶ所ずつ。二つとも施錠された上に内側から閂がかけられていた。どちら側から施錠されたかは不明だが、ドアの鍵孔には内側から布が突っ込まれていたので、外側からは施錠できない。居間のドアの前にはソファが置いてあり、ドアは一インチしか開かないので、発見者たちは力任せにドアを開いてソファを動かさなければならなかった。台所のドアの前には何もなし。窓は二つとも内側から施錠されていた。

Standard-Guide

クレイトン・ロースンは有名なアマチュア奇術師で、芸名の〈グレート・マーリニ〉を作中探偵（奇術師）の名に利用。本作は探偵役だけでなく被害者や容疑者も奇術関係。死体は床に描かれた星印の中に横たわり、星の五つの頂点にはロウソクが立てられ、周囲には呪文が書かれていた。その密室殺人の次は、人間消失、そして足跡のない殺人。さらに、マーリニは、カーの「密室講義」の二つの大分類に異を唱え、第三の大分類を追加している。まさしく、〝奇術師だらけの密室大会〟。

だが、解決篇を読み、読者は思い知らされる——密室を、いや、密室トリックを、いや、密室トリックの解明自体をミスリードに使う作者のマジックを。





何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!